

今月の農業情報

尾張

放射線育種により有望系統を次々に作出！！

とき 平成30年4月～5月

ところ 稲沢市

T園芸（稲沢市）は、オリジナル品種を育成して有利販売につなげるため、農業改良普及課からの提案で、2015年からγ線照射による放射線育種に取り組んでいます。

昨年は、γ線照射により発生した変異株の中から、二次選抜を終えた栄養系コリウス3系統、ガウラ1系統を有望系統と判断し、今年から商品として出荷しています。

さらに今春は、昨年発見したガウラの変異株の二次選抜を終えた株から、性質の異なる2系統を新たに有望系統と判断しました。その内の1系統は、従来品種に比べて葉幅が広く、葉がよじれる特徴的な草姿をしています。すでに一部の市場担当者には照会済みで、従来品種よりも40円程高く売れる見込みです。もう1系統は矮性系統で、ミックス出荷の一つとして期待されています。



【ガウラ・ミックス出荷】
（1トレイに複数系統を入れる）

T園芸では、現在ガウラを7系統保有しており、来春からこの2系統を加えて計9系統となる見込みです。ガウラを看板商品にしたい意向があり、今年度中に2回目のγ線照射を実施し、特徴的な品種の育成に取り組めます。

農業改良普及課は放射線育種の情報を紹介し、照射機関との連絡調整、適切な放射線量の特定、照射方法等の支援を行っています。今後も有望系統の選抜、固定を含めて支援を続け、オリジナル品種の育成につなげていきます。

知多

モノより思い出 プレ母の日の「カーネーション狩り」試行

とき 平成30年5月12日(土)

ところ 武豊町二ツ峯

農業改良普及課では地域の未利用資源の活用促進に取り組んでいます。昨年度から取組を検討していた武豊町の石川園にて「カーネーション狩り」を試行したところ、約20名の消費者が参加しました。これまで石川園では、母の日用出荷を過ぎたカーネーションを知人やパートに無償で配っていましたが、農業改良普及課が「モノ消費」から「コト消費」へ視点を広げ様々な提案を行ったことで、有償での「カーネーション狩り」を実施するに至りました。

参加者自らハウスで好きな色の花を選び、お花に囲まれて母の日を楽しく一緒に過ごす「思い出」作りや、フラワーアレンジを製作し、そのままお母さんへプレゼントする「体験」の企画が好評でした。

「カーネーション狩り」の募集にあたり、経営主の妻がSNSの活用や消費者PRなどを担当し大活躍しました。また、「カーネーション狩り」後、経営主と妻は、花やお客さんの笑顔をSNSを使って発信し、「今後の農園のPR及び地域や産地の花育に役立てていきたい」と来年の開催に意欲を示しました。今後も地域の他の農畜産物の未利用資源が活用されるよう支援していきます。

と き 平成30年5月7日（月）

ところ 豊田市

J Aあいち中央刈谷露地園芸部会では、17名の部会員がスイカを生産しています。そのうち若手生産者4名が授粉作業の省力化を学ぶため、J Aあいち豊田猿投西瓜部会のスイカの栽培状況を視察しました。

刈谷市では大玉スイカや果肉が黄色い小玉スイカのトンネル栽培が盛んで、市場や近隣の直売所からの需要は高まっています。しかし、需要に対応して面積を拡大するには、この時期に行う人工授粉の労力負荷がネックとなっています。

今回の視察では、ミツバチを用いた授粉技術について、J Aやミツバチメーカー、猿投西瓜部会員から学び、栽培ほ場を見学しました。視察した生産者は、授粉日の管理方法、ミツバチの習性、経営的な試算等の具体的な質問をしていました。その結果、2名が今作でミツバチを利用した授粉を試行することになり、非常に有意義な視察となりました。

農業改良普及課では、若手生産者の営農の安定化を支援するとともに、産地振興の取組を支援していきます。



【栽培状況を視察する様子】

と き 平成30年4月19日から5月下旬まで

ところ 豊田市、みよし市

今年のデンドロビウム・フォーミディブルの出荷が、4月19日から始まりました。

管内では、県育成品種である「フォーミアイチ2号(流通名：愛燦々)」が生産されています。「フォーミアイチ2号」は、生育旺盛で花が大きくボリュームがあり、母の日需要にも対応できることから、生産者の評価が高く、生産量を増やす予定となっています。農業改良普及課は、今年度の重点課題として「フォーミアイチ2号」の苗増殖効率の向上を目的とした実証ほを設置し、生産性向上の取組を支援しています。

今後も農業総合試験場と連携し、安定生産に向けた取組を支援していきます。



左【出荷を待つフォーミディブル】
右【「フォーミアイチ2号」】

と き 平成30年4月26日（木）

ところ 新城市作手清岳 ホウレンソウほ場

新城市では、県の「農業生産力パワーアッププロジェクト推進事業」を活用し、4月に「ほうれんそう産地戦略実証協議会」が設立されました。このたび、協議会は自走式収穫機の導入検討会を新城市作手地区で行いました。



【興味深く説明を聞く生産者ら】

当地ではハウレンソウの根を鎌で切って収穫します。しゃがみ姿勢は腰への負担が大きく、その負担は調製作業の効率にも影響します。人手不足への対応や、産地規模の拡大を目指す上でも、各作業の省力化は必須です。

当日は、生産者T氏のハウス1.5aに、生産者、JA、農業改良普及課が集まり、埼玉県の農機メーカー社長が収穫機を持参し、実演しました。収穫機は、クローラー式の機体脇に付いた刈刃を土の中に差し込み、前進しながらハウレンソウの根を切るタイプです。

T氏始め生産者3名のほか、経験の少ない新規就農者S氏の妻も加わり、実際に収穫機を操り、機械の速度や操作性、収穫精度などを確認しました。

農業改良普及課が作業速度を調査したところ、刈り作業のみの速度は、1畝あたり約90秒でした（約20m。条間15cm、2条）。

生産者3名の感想は、「事前の想定より性能が良く役に立つ印象。ただし、価格が課題」でした。今後、季節で異なる株の状態や、ほ場条件の違いによる機械の適応性を3回確認し、実用性を評価します。

と き 平成30年4月11日（水）

ところ JAひまわり音羽グリーンセンター（豊川市赤坂町）

JAひまわりは、農業改良普及課の支援のもと、地元で生産される花木類※のカタログを約2年かけて作成し、音羽、一宮、豊川の3か所のグリーンセンター（GC）に設置しました。このたび、この取組を広く周知するため、JAがプレスリリースを行い、企画者であるJA、農業改良普及課、多品目を出荷する代表的な生産者の3者が、新聞5社の取材を受けました。



【左からJA直販課長、担当普及指導員、生産者】

カタログには、GCに出荷される花木類149品目が写真入りで紹介されています。出荷時期や数量などのデータに加え、植物分類や原産地などの情報も記載されており、来客や産直会員が自由に閲覧し、店頭にはない品目を注文することもできます。取材では、カタログ作成の経緯や狙い、利用場面等、様々な質問が出され、対応した3者がそれぞれ思いを語りました。

今回、新聞に記事が掲載されたことにより、早速、華道家からJAへ問合せが入るなどの反響があり、産地の活性化に大いに活用されることを期待しています。

※ここでは、供花やいけばな花材となる枝物、切り葉などを指す。

とき 平成30年4月17日（火）

ところ 田原市赤羽根文化ホール（田原市赤羽根町）

J A愛知みなみ常春部会（品目：キャベツ）の平成29年度出荷反省会が行われ、出荷実績が報告されました。販売金額は、過去最高の82億円（前年度対比121%）となりました。10kg段ボール箱出荷量は、春夏作（4月～7月）が12.6万t（同143%）で、秋冬作（10月～3月）が35.2万t（同91.5%）でした。

10月中下旬の曇雨天と台風、その後の低温及び干ばつというこれまでに経験したことのない天候のなか、全国的に不作であったにもかかわらず、当部会は高い技術力により秋冬作では前年の91.5%の出荷量が確保されました。

卸売会社からは、「価格の高騰は、全体の出荷量が少なかった影響が大きかったことに加え、一定量を必要とする業務需要の影響も大きかった。」「天候不順のなか、常春部会はしっかり供給責任を果たしてくれた。」と感謝の言葉が述べられました。

農業改良普及課は、今回の経験が今後の天候不順時に活かせるよう、常春部会員やJ Aと情報共有を図っていきます。



【あいさつする富田部会長】